とある男のＩＳな話

ぱりお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある男のＩＳな話

【Ｎコード】
Ｎ２９８３Ｚ

【作者名】
ぱりお

【あらすじ】
伊波涼太はどこにでもいる中学3年生の男の子。しかし、ある交通事故に巻き込まれ、早すぎる死を迎えてしまう。しかも目覚めた場所は天国ではなくどこかの研究所。
そこであったのがＩＳの登場人物篠ノ之束と量産型ＩＳ打鉄であった。
涼太「ありえない。こんなことあるわけない・・・。」
そんな伊波涼太を交えたちょっとおかしいＩＳストーリーが今始まる。

作者の初投稿作品です。よろしくお願いします。
それと作者はアニメと二次創作での知識しかないので、そこのところもよろしくです。

プロローグ（前書き）

がんばります！

プロローグ

プロローグ

　ドオオォン！！

その音とともに俺は宙に投げ出された。

あぁ、死んだな。直感的にそう思った。

その日、俺こと伊波（いなみ）　涼太（りょうた）は上機嫌だった。なんせ2年間俺の片思いだと思い込んでいた女の子にいきなり告白されたのだから。もちろんOKした。即効でOKした。

しかも「これから涼太くんってよんでもいい？」って上目遣いで聞かれたときには死んでもいいって思ったよ。いやむしろ萌え死ぬところだった。

神様ありがとう！いるって信じてないけどありがとう！

ラブラブな俺達は手を繋ぎながら下校した。

やべぇ俺今人生で一番幸せだ。彼女と喋りながらそんなことを思う。

だが楽しい時間ほどすぐ過ぎる。彼女の家に着くのはあっとゆう間だった。

「ばいばい涼太くん。また明日ね！」

花の咲いたような笑顔で手を振る彼女。手を振りかえし、家に入っていくのを見送る。

・・・・・ちくしょうかわいすぎるだろ！俺を殺す気かよくそっ！

ニヤける顔を両手で押さえながら歩き出した。あ、そういえばとあることを思い出す。

「小説買いにいくの忘れてた。」

帰りに買うはずだった小説のことをすっかり忘れていた。

家に帰る前に本屋に行こう。ここからそう遠くないはず。

5分くらい歩き本屋のある大通りに出た。近くの公園では子供達がサッカーをして遊んでいる。

楽しそうだなとおもいながら公園の横を通りすぎる。

そういや小さいときよくここでサッカーしたな。俺超へたくそだったけど・・・。

あのころディフェンスしかやらしてもらえn『プーーーーーーーーーーー』な、なんだ？

音の聞こえたほうを見ると公園にいた一人の男の子がボールを追って道路に飛び出していた。

トラックの運転手はあわててブレーキを踏んだがもう手遅れのようだ。そのまま男の子に突っ込んで行く。

危ないっ！！

考える前に体は動いていた。全速力でその場に向かい男の子を突き飛ばす。

直後に、俺はトラックに吹き飛ばされた。そして、

地面に叩きつけられ血を吐き出す。

「ぐはっ！！・・・はぁ・・・はぁ・・・」

なんとなくわかった。俺、死ぬだろうなぁ。なんだか呼吸しにくい

し。

それはそうと男の子をほうを見る。泣いているが無事のようだ。

よかった・・・。

仰向けになり空を見る。むかつくほどきれいな青空だった。

神様の・・・くそったれ・・。

そうつぶやきながら、意識を手放した。

第1話　トリップしちゃいました。（前書き）

一応なんども読み直していますが、誤字などあるかもしれません。

それでもいいいならどうぞー！

第１話　トリップしちゃいました。

？？？　ｓｉｄｅ

ここをこうして、ここは・・・こうかな。え・・あれぇ？
あーやっぱりワンオフアビリティの容量が大きいせいかなー・・。
それに腕パーツのせいで全体のバランスがおかしいかも。
うむむ・・・・『緊急事態発生。緊急事態発生。』へ？

『侵入者を発見。』

侵入者！？ここがばれたって言うの？
でもどうやって・・・。

『現在、ＩＳ保管庫にいます。』

私を捕まえにきたのかな？それともＩＳの技術を奪うため？

どっちにしろ私の研究を邪魔するなんて、いい度胸だね！

どんなやつか顔をみてやろう、そしてココに来たことを後悔させてあげるよ。

私は保管庫に向かった。

中に入ってみるとそいつは床に倒れていた。どうやら気絶しているようだ。

勝手に人様の家にあがりこんでおいて何がしたいんだろうこいつは・・・。

あ、起き上がった。周りを見渡しているようだ。

いっくんと同じ年位の子かな。まあ関係ないか、そんなの。

「ねぇ、君。勝手に家に上がりこんで何をしているのかな・・・。」

どうせ始末するんだしね。

涼太　ｓｉｄｅ

「・・・た！・・・うた！」

・・・。

「・・ょうた！・・・きなさい！」

ん。母さん？もうちょっと寝かせてくれよ・・・。

「何言ってるの！早く起きないと遅刻するわよ！」

・・・あーもうわかったよ。朝から大声だすなって。

まだ眠いが母さんがうるさいので起きる事にする。

だいたい今何時だよ。目を擦りながら部屋の時計を見る、ってあれ時計がない。

それどころか自分が寝ていた場所は鉄板の床だった。

なんで俺こんなとこに・・？

必死に寝る前のことを思い出す。

たしか、昨日は2年間片思いだと思ってた子に告白されたんだったよな！

もちろんｏｋして、そのまま一緒に下校。家まで送って・・・。

小説買い忘れたの思い出して、本屋に行って、

その途中の公園でサッカー・・ん？・・・サッカーやってた子供が・・！？？！？？！！？！？

そうだ思い出した！俺トラックにひかれたんだ！

じゃあココは病院か・・・？いやいや、病院がこんなメタルチックな場所であってたまるか。てか工場にしか見えないし。

周りを見回してみると、ロボットのようなものが目に入った。

！？　あれってもしかしｔ「ねぇ、君。勝手に家に上がりこんで何をしているのかな・・・。」

突然誰かに話しかけられた。声から察するに女性だろう。

でもなんだろ。この声、どこかで聞いたことがあるような・・・。

そんなことを思いながら、うしろを振り向く。

え・・・？

いやいやいや・・・ありえない。こんなことあるわけない。

「篠ノ之　束・・・？」

だってそこにいたのは俺がはまっていたアニメ【インフィニット・ストラトス】にでてくる登場人物　篠ノ之束（しのののたばね）だったのだから。

第一話　トリップしちゃいました。

「それで、君はなんでココにいるのかな？」

いや、まて本物の篠ノ之束なわけないだろ。なに考えてんだ俺。

きっとコスプレしたそっくりさんに決まってる。

そうだ。絶対そうだ、ハハハばかだな俺！・・・落ち着けよ。

「い、いやあの、自分もなんでココにいるのかよくわかってなくて・・。」

本当のことだ。嘘はついてない、けど・・・。

「そんなデタラメ束さんが信じると思ってるの？」

うわ、めっちゃなりきってる。声も超にてるし。ってそんなことはどうでもいい！

やっぱ信じてもらえないか・・・。とりあえず事情を話してみよう。

なにも言わないよりマシな気がする。

「ほ、本当なんです！実は―――――。」

「・・・トラックに轢かれて死んだとおもったら、ココで寝てた？

つくならもっとマシな嘘にしなよ。」

「嘘じゃないんですってば！？」

イラついているご様子。あれ、これ逆効果だったんじゃ・・・。

「じゃあ例えば君は自分の家に不法侵入してきたヤツに『気付いたらココにいました』なんて言われて

ソレを信じられるの？ねぇ。」

「そ、それは・・・。」

無理だ。信じられるわけがない。迷わず警察に通報するに決まってる。

「もういいよ。どうせ君はココで死ぬんだから。」

「ちょ！！な、なんで！？」

「当然でしょ？束さんの秘密の研究所を見られちゃったんだから。
　このまま返すわけにはいかないよ。」

――カチャ。

女が銃を構える。俺は驚いて腰を抜かしてしまった。
そりゃびびるだろ。銃口向けられたのなんてはじめてなんだから。

「私も本当はこんなことしたくないんだけど、
　居場所を知られるとめんどーな事になっちゃうから、しょうがないよね？」

しょうがなくねーよ。他に方法なんていくらでもあんだろ！
監禁とかさ！・・・どっちもいやだけど！
女はじりじりと俺との距離を詰めていく。
腰が抜けて立てないので、手で体を支えて後ろに下がる。
が、背中に何か当たった。たぶん壁だろう。

はぁ・・・せっかく生きてたのになぁ・・・。

俺は覚悟を決め、目をぎゅっとつぶる。

直後に銃声、じゃなく後ろで何か音がした。

ーーーーーーーキュィイイン！

な、なんだ?

「まさか・・・反応してる！？でも彼はどう見たって男性だs・・・ブツブツ・・。」

女がなにかつぶやいている。何をブツブツ言っているのか気になったがとりあえず

後ろで動いている何かを確認することにした。

「ま、マジかよ・・・。」

そこには同じくアニメ【インフィニット・ストラトス】に出てくる
ＩＳ”打鉄”が置いてあった。

さっきチラっと見えたけど、やっぱそうだったのか・・。

じゃあ目の前のは本物の篠ノ之束で、ここはＩＳの世界ってか！？

せっかく冷静になれたのにまたパニくってきた。ありえねぇぇぇええええええ！？

「ねぇ君。」

「（どうしてこうなったあぁぁぁぁ）・・・へ？」

「じつは女の子だったりする？」

「んなわけねーだろ！どう見ても男だろーが！！」

あ、やべぇ。パニくり過ぎて口調が・・・。

お、怒ってない、よな？

「やっぱり男性か・・・でもそしたらどうして・・・ブツブツ・・」

よかったー怒ってないっぽい。

女は一通り悩んだ後、また俺に質問する。

「君。名前は？」

「伊波。伊波涼太、です。」

どうしたんだ？いきなり名前聞かれたけど、もしかして殺されずにすむんだろうか・・・。

「そう。じゃあ伊波。君に2つの選択肢をあげよう！」

なんかいきなりテンションあがってるー・・・。ん？選択肢？

「1！ココでおとなしくやられる。」

ふざけんな。いやに決まってる。

「2！ココで私の研究をお手伝いする。」

・・・・・は？

「・・・・・2で。」

「おっけー。じゃあこれからよろしくね！伊波。」

「ま、まってください。なんで急に気が変わったんです？」

不気味すぎる・・・なにか企んでるのか。

「ん？あーそれはね、君が世にもめずらしい、男性でＩＳを動かせる人間だからだよ！」

・・・そーゆーことか。つまりあれだ、モルモットになれと。

正直嫌だけど死にたくないしなー・・・。はぁ。

「でも、いいんですか？得体も知れないい俺に研究の手伝いなんかさせて。」

「問題ないよ。今から君にはこれをつけてもらうから。」

と言ってなにかを腕に取り付けられた。・・・腕輪？

「伊波がなにかしようとしたらそれが手首をスパーン！だから大丈夫っ！」

大丈夫じゃねぇ！？なに笑顔で物騒なこといってんのこの人！？

外れろ！この野郎！！スパーンなんて嫌だ！！！

「これからよろしくねっ！」

「・・・・よろしくお願いします。」

ホント・・・神様のくそったれが・・・orz

第2話　その後の日常（前書き）

主人公は仲良くなるとすぐ調子に乗るタイプの人です。

第２話　その後の日常

第２話　その後の日常

「ふむふむ。なるほどなるほど。身長は１７２ｃｍ　体重は５６ｋｇ

視力両目ともに１．５　運動神経まあまあ　好きな食べ物ハンバーグ、と！」

「あのーそのデータは意味あるんですか？特に好きな食べ物・・。」

「あるよ、もちろん。その人のデータを元にＩＳを組み立てると使いやすさが全然違うからね。

あと食べ物は聞いてみただけー。ハンバーグ、ぷッ。」

なんでハンバーグで笑ったの？ハンバーグさんＤＩＳってんの？

ちょっと表でｒすいませんせん調子乗ってました。

束さん（って呼べって言われた）の研究の手伝いをすることで、

生かしてもらえることになった俺は、さっそく身体検査をさせられていた。

てか初対面のときと全然雰囲気ちがくね・・・？ま、断然こっちのほうがいいんだけどさ。

「それでまぁ、これから伊波には実際にＩＳを操縦してもらうことになるんだけど、

動かし方とかわからないよね？」

「はい。動かし方はもちろんＩＳ関連の知識はほとんどないっす。」

そりゃそうだ。アニメ見ただけなんだから。

女しか乗れないってことぐらいしか覚えてない。俺男だけどさ。

こんなことになるなら小説も買っておくんだったなぁ・・・。

「そっか。じゃあこれから一週間この天才束さんがみっちりＩＳのなんたるかを

叩き込んであげるから大船に乗ったつもりでいなさい！ぶいぶい！」

「・・・はい。」

こうして一週間、ＩＳについて猛勉強した。

正直教え方がうまかったので全然苦ではなかった。さすが天災。

――――――――――？？？―――――――――

今俺は名前もしらない荒地に突っ立っていた。

ここどこだよ・・・。日本・・・なのか？

「それじゃ今日からＩＳを動かしてもらうよ。いいデータが取れるようにがんばろう！」

目の前にＩＳが置いてある。”打鉄”だ。

アニメみてて思ったけど、かなりかっこいいよなこいつ。武器が刀ってのがさらにいい！

このまま眺めててもいいのだが、束さんの目線が痛いのでしょうがないから乗ってやる。

べ、別にアンタの目がこわいから乗るわけじゃないんだからね！！

「どう？一応伊波に合うようにちょちょっといじってみたんだけど。」

「すごくしっくりきます。いい感じです。」

ＩＳが体の一部みたいだ。まるで違和感がない。

「でしょでしょー？それじゃ適当に動いてみてー。」

言われたとおり好きに動いてみる。

えーと歩行は・・・

ガシャン、ガシャン。

おおぉぉぉ！！やばいテンションあがる！なんだこれ、新感覚だ。
チンさむはんぱねぇ！

じゃあ次は飛んでみよう。イメージ、イメージ。

――――ふわっ。

おおおおおぉぉぉぉ！！！

俺飛んでる！超飛んでる！すげぇ！マジＩＳすげぇ！うえぇ酔って来たー！

おろろろろろろろろろ。

しばし休憩中・・・。

てゆうか空からまわり３６０。見渡してもなにもないな。ひたすら荒地だ。

休憩後また空にあがり、空中散歩を楽しんでいた。酔い止め？そんなのねぇよ！

「おっけー。じゃあ一旦戻ってきてー。」

いきなり目の前の画面に束さんが映り、話しかけてきた。

色々考えているうちに結構な距離飛んでいたらしい。

んじゃ戻るか。機体を旋回させて束さんの元に飛んでいく。

ようやく東さんをみつけ、高度をさげる。そしてふと思う。

「あれ・・・。そういや、どうやって減速するんだっけ？」

ブレーキはどこですか？

東さんが近づいてくる。いや、正確には俺が近づいているんだが・・。

やば。まじでどうすればいいんだっけ！？このままじゃ東さんにぶつかる！

そ、そうだ。体をそらすイメージってもうおせぇ！！

「うわあああああああああああああ！！」

「えぇぇぇえええええええええええええ！？」

────ドォオオン！！

爆音とともに俺顔から地面につっこんだ。何も見えない。
埋まっている頭を引っ張り、周りを見渡す。束さんがいない。
近くに見覚えのあるウサ耳を見つける。
ど・・・どうしてこんなところに・・・！
「た、束さん・・・。な、なんで・・・こんなことに・・・ｏｒｚ」

「・・・・・・。」

うしろからものすごい殺気がする。いや、気のせいだろう。こんなところに人がいるはずない。
気のせいに決まってる。それより束さんが・・・ちくしょう！！
「くそっ！いったい、いったい誰が束さんを・・・許さない！
絶対にゆｒ「てりゃあああ！！！」ぶふぉおおお！」
突然後頭部に重い衝撃がはしり、再び顔が地面に埋まる。暗い。

首を引っこ抜き、とび蹴りをかましたであろう彼女に一言。

「・・・なにするんですか。」

「それはこっちの台詞だよ！なんで私につっこんできたの！？危うく死ぬところだったよ！

しかも意味わからない茶番はじめるし！！」

止め方忘れてたんですもん。てか生きてたんですね。あと茶番とか言うな。

「勝手に殺さないでよ！・・・はぁ。次からは気ををつけてよね。ホントにもう・・・。」

さーせんした。以後気をつけます。

「じゃあ、今日はコレぐらいで。はいこれ。しっかりその顔消毒しときなよ？」

そういいながら俺に日本酒を渡し、どこかに帰っていった。

これで消毒しろと・・・？って置いてかないで！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2983z/

とある男のＩＳな話

2011年12月11日17時46分発行